

I サムエル3章1～21節「しもべは聞いております」

私たちクリスチャンは主のみことばに聞き従って生きていけるようにと願っています。主がみことばによって私たちに語りかけてくださることを経験していますので、そのみことばによる恵みを分かち合うことを喜びとしたいと思います。

「エリのもとで主に仕えていた」サムエルがいよいよ個人的に主を知るときが来ました。その出来事が3章に書かれています。この記事から、主のみことばを聞く態度について教えられたいと思います。

1. 主が呼ばれた（：1～9）

まず、そのころのイスラエルの状況について、またサムエルの状況についての説明があります。1節。

そのころ、イスラエルには主の預言者がいなかったということです。直前に記されているように、神の人によって主のことばがエリに告げられましたが、この神の人は名前が記されておらず、おそらくこの時だけ主に用いられたのでしょうか。継続して、預言者として働きをする人はいなかったのでしょうか。

そのような中で、サムエルに主が働きかけるのです。その状況についての説明が記されます。2～3節。

ある日の夜のことでした。「神のともしびが消される前」とあります。朝になって聖所の燭台のともしびが消される前、夜にあった出来事でした。エリは自分のところで寝ていて、またサムエルは「主の神殿」で寝ていたということです。サムエルは、任されている役割のために、聖所に近い所で寝ていたのでしょうか。

4～5節。夜、寝ている時に呼ばれて、すぐに「はい、ここにおります」と答えて、エリのところに走って行くというのですから、少年サムエルがエリのもとで忠実に仕えていたことが分かります。エリは呼んでいないと言うので、サムエルは戻って寝ました。

二度目に主がサムエルを呼ばれました。6節。サムエルはまた同じように、エリのところに行きました。しかし、今度もエリは呼んでいませんでした。

7節。サムエルは神殿で主に仕えていましたが、主との個人的な関係を持つことを知りませんでした。

ここで、主を知ることと主のことばが示されることが並べられて言い換えられています。このことから分かるように、主を知るとは、みことばを通してご自身を示される主のみこころを知ることなのです。

サムエルが戻って寝ていると、主が三度目にサムエルを呼びました。8節。3回繰り返されるということは重要なことの表れです。エリはそこで気がつきました。主がサムエルを呼んでおられるのだ。それで、サムエルに教えました。9節。

旧約時代、神様がみこころを示す時には様々な方法が用いられました。今も神様は聖書によって私たちに語ってくださいます。神の啓示は聖書によって完結しています。そして、聖霊なる神様がみことばとともに働いて、私たちに教えてくださいます。神様の語りかけがあることを期待して、「主よ。お話ください」と心を開いてみことばを聞くことが大事です。

また、「しもべは聞いております」という心の態度も大事です。サムエルがエリに従順に仕えていたことに感心します。そのようなサムエルですから主のみことばにも当然のこととして従いました。神様は主であり、自分はしもべです。主のみことばの通りに従います。そのような従順な態度でいましたから、神様の語りかけを聞くことができたのです。

私たちは自分の期待を聖書に読み込もうとすることがあります。自分が聞きたいことを聞こうとする自己中心なことがあります。そうではなく、主のみことばを聞き、自分の思いと違っても、主のみこころの通りに従いますというしもべとしての態度が大事です。

主が語りかけてくださることを期待して、示されるみこころに聞き従おうとするしもべの心をもって、みことばを聞くことが大事なのです。

2. 主のことばを聞く（：10～14）

こうして4回目に主がサムエルを呼ばれました。この時は、「主が来て、そばに立ち」とあります。主のことばを聞く備えができたサムエルのそば近くに主が来られたのでした。

そして、「サムエル、サムエル」と2回繰り返して名前を呼ばれました。このように主が人の名前を繰り返して呼ばれたことが、聖書の他の箇所にも記されています。アブラハムに対して、ヤコブに対して、モーセに対して、主が同じように名前を繰り返して呼ばれました。しかも、そのように主が呼びかけたのは、それぞれの人生において主に従い大きな変化を経験する大事な時でした。

サムエルはエリに教えられた通りに答えました。ただ、「主よ」という呼びかけはありません。サムエルはまだ主を知らなかったと言われてるように、主のことばを聞くのは初めてでしたから、恐れ多くて「主よ」と呼ぶことができなかつたのかもしれない。

サムエルが主を知って、主に従うことを始める最初の時に、このように主が彼に近づいて、名前を繰り返して呼んで、語りかけたのでした。

私たちの人生の大事な時にも、主は近づいて、みことばをもって繰り返し語ってくださることがあります。そのときのことを思い返すと、確かに主が近づいてくださっていたと思うのです。

この時、主がサムエルにお語りになった内容は、祭司エリの家にはさばきが行われるというものでした。2章に記されている神の人がエリに告げた内容と重なるものでした。11節にある「両耳が鳴る」という表現は、聖書の他の箇所にもあり、「わざわい」が起こるとの預言が語られるときに使われています。エリの家にはわざわいが起こるのは、エリの息子たちが罪を犯し続けて、悔い改めることがなかつたからです。また、エリも息子たちの罪を知って注意していましたが、息子たちを治めることができなかったからです。

14節。2章にある神の人のことばの中で、「わたしが命じたわたしへのいけにえ、わたしへのささげ物を、わたしの住まいで足蹴にするのか」と言われていました。ですから、いけにえとささげ物は彼らのためには何の効力も持ちません。エリの息子たちは反抗的に罪を犯し続けていたので、彼らの罪は取り除くことができませんでした(民数15:30~31、へブル10:26~27)。

3. 主の預言者として (: 15~21)

そのような主のことばを聞いた少年サムエルは、自分に告げられたことをエリに知らせるのを恐れました。しかし、エリがサムエルを呼んで、主がお告げになったことばを隠さずに語るようにと命じます。

サムエルは「すべてのことをエリに知らせて、何も隠さなかつた」のでした。自分の願いや判断で、主のことばを曲げたり、部分的に隠したり、誇張したりする者は、主のことばを受けた者としてふさわしくありません。みことばをまっすぐに語るなら、神のさばきについても語ることになります。さばきが臨むとの警告はあまり語りたくないことです。しかし、主のことばは隠さずに語らなければなりません。

このことが預言者の務めです。神に召され、神のメッセージを受け取り、神に遣わされて、神のメッセージを伝えることで、預言者の役割を果たすのです。サムエルは主の預言者として召されたのでした。

主の預言者としてのこの最初の経験の後、サムエルは成長しました。19~20節。サムエルは肉体的にも霊的にも成長して、預言者として整えられていきました。サムエルが主からのことばとして語ったことがいつも正しいものでした。それで、イスラエル中の人々はサムエルが主の預言者として立てられたことを認めました。

21節。「主のことばはまれにしか」なかつたと始まったこの出来事の記述が、「主のことばによって、サムエルにご自分を現された」ことに行き着きました。そして、サムエルが主の預言者として「堅く立てられた」のでした。こうして誕生する前からの出来事が記されてきたサムエルの成長の記録が目指していたところに来ました。サムエルは幼い頃から主の神殿で主に仕えていましたが、成長して主の預言者として全イスラエルに仕えるようになったのです。

この箇所から教えられるように、私たちも主のことばを聞くために、「主よ、お話してください。しもべは聞いております」と申し上げるようにしましょう。主が語りかけてくださることを期待して、示されるみこころに聞き従おうとするしもべの心をもって、みことばを聞きましょ。そして、主のことばを聞いたなら、みことばを隠さずに伝えましょ。そうするなら、主の存在と主権を示し、主のみこころを教えることになり、それによって主の恵みにあずかる人たちが起こされるのです。